

## 貨幣経済学の過去と現在

水田 健（東日本国際大学）

野口 旭（専修大学）

経済学を貨幣にかかわる視点からながめるならば、重商主義期から現代まで、いくつもの大きな争点とさまざまな思考の対立が浮かび上がってくる。古典派の重商主義批判に始まり、地金論争（地金主義者の過剰発行批判と兌換再開要求、反地金主義者の真正手形学説）、通貨論争（通貨学派の数量説と銀行学派の還流法則）、マルクスの古典派批判、ヴィクセルによる貨幣数量説批判、ミュルダールやハイエクなどのヴィクセル・コネクションによる古典派二分法批判、ケインズによる古典派批判、さらにはケインジアン・マネタリスト論争、「新しい古典派」によるケインズ経済学＝伝統的マクロ経済学批判など、貨幣をめぐる思考の対立の実例は枚挙にいとまがない。そこでは、貨幣経済と実物経済との関連、中央銀行の役割、貨幣・信用制度の機能、景気循環論における貨幣の役割など、いくつもの論点が繰り返し議論されてきた。

そのなかで、貨幣数量説、真正手形学説および内生的貨幣供給論（銀行学派、ポスト・ケインジアン、日銀理論等）、ヴィクセル的累積過程の理論、IS-LM モデルなどによって表示されるケインズ体系、貨幣的景気循環論、実物的景気循環論、動学的一般均衡理論など、いくつもの有力な概念や枠組みが登場した。そしてそれらは、それぞれの時代的課題に対応した理論として、その固有の課題を分析する道具として利用されるとともに、時代を超えた普遍性持つ理論として抽象化され、経済学にとっての必須の分析用具としての役割を果たしてきた。

貨幣にかかわる論点がこのように複雑に錯綜するのは、近年のインフレ・ターゲットをめぐる論争などにも示されているように、それが現実の政策と深いかわりを持っているからである。つまり、貨幣的現象についての分析は、過去から現代にかけて、経済理論と政策の双方にかかわる重要な論点を提供してきたのである。今回の共通論題では、過去から現在までの貨幣経済学上のさまざまな論点を、現代的な課題をも踏まえつつ考察する。そのことは、過去と現代とにまたがるいくつもの重要な理論的および政策的課題の解明に役立つものと思われる。